

仰木の民俗誌・牛と人の関係

「仰木ふるさと五感体験アンケート」より考察する

大原 歩

Title :

Ogi Folkloristics : The Interdependence between Cows and People

Summary :

This report is based on data collected in the “Questionnaire regarding First-Hand Experiences of Life in Ogi,” conducted in Ogi in Otsu City, Shiga Prefecture. It examines the vital relationship between cows and people in the life of farming villages between the years 1945 and 1965.

はじめに

成安造形大学附属近江学研究所における近江学研究「里山・水とくらし」の第二期として二〇一一年より二年間、研究活動「仰木の生活文化の聞き取り調査及び仰木ふるさとカルタ制作」〔註〕に取り組んだ。本稿は、研究活動の過程で滋賀県大津市仰木地区の六〇歳以上で組織する「仰木学区老人クラブ」を対象に実施した「仰木ふるさと五感体験アンケート」〔註〕においてキーワードとして多く記述された「牛」に着目する。農耕の暮らしに欠かせなかった「牛」との暮らしを読み解くことにより、昭和二〇～四〇年代という手が届く過去において、仰木地区で営まれてきた自然と対峙した厳しくも豊かな生活文化の一端を記録することを試みた。

第一章 仰木ふるさと五感体験アンケート「牛」――

「仰木ふるさと五感体験アンケート」（以下アンケート）は、当時の五感体験、身体感覚を思い出し書き出していた。一八五枚集まったアンケートの中から、牛についての記述は、

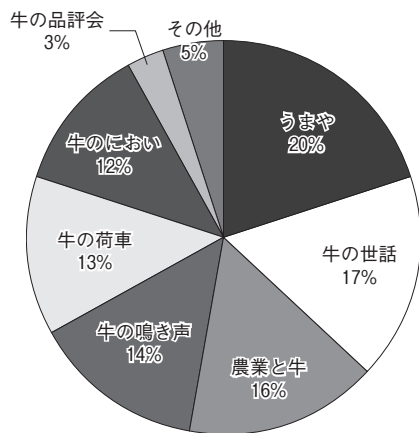


図1：「仰木五感体験アンケート」における牛の記述に関する分類

一二九項目あった。
内容を分類すると、図1のようになる。「うまや」と呼ばれる牛小屋・牛舎が家の中にあつた様子など牛との共同生活の様子がわかる記述が一番多く、次に、牛のエサ取りやエサづくりなど子供も一緒に取り組んだ「牛の世話」に関するものが多かった。三番目、五番目には田仕事や山仕事における牛の役割について、また、四番目、六番目には牛の鳴き声やにおいなど、時間がたつてもよみがえる嗅覚や聴覚の記憶に残つたという記述があつた。その他には、牛の品評会、牛祭りについてなど、牛の売買や祭礼にまつわるものがあつた。

第二章より表記する抜粋したアンケートの執筆者については、文末のかっこ内に順に（アンケートを回収した二〇一一年時の年齢、性別、在住地、アンケート番号）と記す。

第二章 生産生活に欠かせない牛

仰木では、昭和三〇年代に耕耘機が販売されるまで、牛が労力として重宝されてきた。

高低差のある棚田での農作業、秋の稲刈りの運搬、また山で伐採した木を伐り出すなど田畑・山仕事には牛が必須であつた。黒毛牛がほとんどで、昔は力強い雄牛が多かつたが、戦後は男手が少なくなつたため女性でも扱いやすく大人しい雌牛を飼う家が多くなつていったという。どれほど牛がいたかという点、杉立繁雄氏の『八坂神社の笹神輿』を引用すると、「宝永三年（一七〇六）の「下仰木村指出帳之覚」には下仰木村一七〇軒に対して牛六六疋・馬十二疋。明治十三年の『滋賀県物産誌』には仰木全体で四五七軒に対して牛二〇〇疋」が記録されている。その後、「昭和初期までには、殆どの農家に一頭の牛が飼われていた」という。

二一 田仕事

牛の労力が一番必要とされていたのは、「田仕事」であつた。棚田を耕作する上で一番重要な土を起こし、酸素を含ませ、養

分を蓄え、土をならし、水が抜けないよう水を張る「田んぼのこしらえ」。仰木では粘土質の泥田が多く、ぬかるみの中の田仕事には牛の力が不可欠であった。以下、アンケートをまとめて記す。

農業は牛なしではできない。(七〇歳、男性、上仰木、番号92)／田んぼを耕作するのに牛でカラスキを引っ張り、耕していた。(七〇歳、男性、上仰木、番号129)／土質は粘土層で痩せた土地が多く、農耕には人力だけではとても困難であり、先祖の人々は貧苦の中から牛を飼い、労力の重要な担い手として大切に扱い、共生してきた。(八八歳、女性、平尾、番号185)／小学生の頃から牛でカラスキを持って田んぼを耕した。またクワでかくれば、大昔に噴火した跡と思うが、火山の灰色の土がにゅっと出てきた。この土が乾くとクワがはね返ってきて細かくできなかった。その場所の付近へいたら牛が沈んで行つて牛がなかなか上がれなかったこと、とてつもなく長い孟宗竹を差ししても沈んでいたことなどを覚えている。(六七歳、男性、上仰木、番号86)

二二 山仕事、運搬

また農閑期には、山仕事や、米俵や丸太などの物資の運搬にも牛が活躍した。山仕事は、山の谷あいでも切り出した六間ほど(約十一メートル)の丸太や材木を、キンマ(木馬…木材で作られたそり)を使って尾根道まで引き出す作業があった。また、

大津や京都など遠方へ米俵などを運搬した際は、牛用の藁の杓を前足に履かせ、牛の蹄を傷つけないように気をつかった。冬の寒い時期には、角に八の字に布を巻いたり、背中に毛布をかけてから鞍を乗せるなどの防寒をし、大切にされていた。

アンケートをまとめて記す。

親が木伐を伐出していた。車ではなく荷車を引っ張るのは牛でした。牛の仕草の掛声「オウ、シイツ」、そして坂道を帰ってくるキーツというきびしいブレイキの音で今日も無事に帰ってきてくれたと夕方ホッとする一刻でした。(七四歳、女性、下仰木、番号34)／私たちの子供の頃は、重たいものを運ぶ時は荷車を牛に引っ張ってもらってガタガタ道を歩く生活でした。秋は日が短いので、暗くなつて父が帰ってくる時、タイヤが金の玉だったので、チャリンチャリンと大きい音が聞こえてくると「ああ、お父さんの音や」と言つて、外へ出迎えに行つたものです。(六九歳、女性、上仰木、番号89)／農作業の運搬は鉄車輪の荷車を牛に引かせ、「シイツチャイ」と尻をたたいていた。(七九歳、女性、上仰木、番号135)

第三章 牛と暮らす

生産生活を支えるために一家に一頭は牛を飼っていた。牛を維持することは大変なことであった。この章では、牛と共に暮らす生活へ目をむける。

三ー うまや

仰木の百姓の家には、「うまや」と呼ばれる牛小屋が家の中にあり、一つ屋根の下、牛と共に暮らしていた。以下、アンケートをまとめて記す。

昔の家は玄関より入ると土間があり、居間は殆んどの家は六畳の居間が4間あり、居間の反対側には牛舎があり、訪ねて行くと牛が顔を出して挨拶してくれることがどの家にも多くられた。(九九歳、男性、平尾、番号25)／家入って右側の間が牛小屋だった。(六九歳、女性、上仰木、番号96)／玄関の横に牛小屋があり、知らない人が玄関と間違えて戸を開けたら牛が出てきてびっくりした笑い話がある。(六二歳、男性、下仰木、番号32)

記述と聞き取りをもとに当時の「うまや」のある民家の平面図(図2)を描いてみると、うまやが土間・台所の一角にあることがわかる。牛は土間側へ顔を出し、そこでエサを与えた。うまやには、短く刻んだ稲わらを敷き、二日に一度昼頃に片づけ、糞と一緒に田の肥料とした。

また、子供心に強烈だったのは、うまやのおいだったようだ。アンケートをまとめて記す。

家の中に入ったら、どの家でも牛のにおいがした。(七六歳、男性、下仰木、番号71)／牛のにおいより馬屋の臭いがきつかった。その馬屋からフンを手でつかんで丸めて棒で挿して田んぼまで運んだものである。臭いもくそも言っていられなかった。

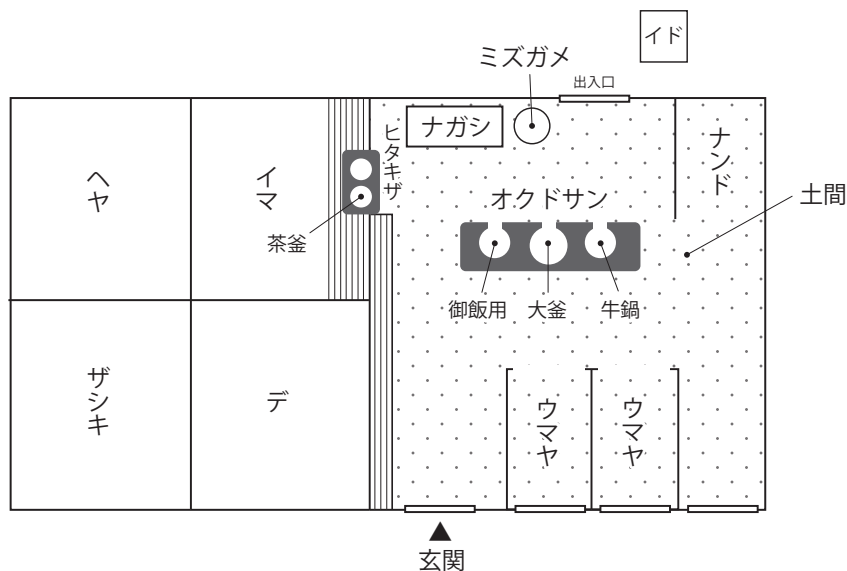


図2：ウマヤのある仰木の農家の平面構成

それが田んぼを作る常識だから。家の玄関に入った所に馬屋があるので家中が臭く、昔はハエ取り紙がなかったからハエが飛びまわっていた。(六九歳、男性、上仰木、番号133)

また、外に牛をつなぐ時には、

「牛つなぎと言った丈夫な木につながれていた。(七三歳、女性、下仰木、番号173)」昔は自分の家で牛を飼っていたのでよく牛の世話をした。そして牛をつなぐ木(なつめの木)があつてそこでよく牛の体をこすってきれいにした。(七一歳、女性、下仰木、番号175)」など、

特定のなつめの木を庭木として育成し使用していた。牛の体を洗うときや角を切る時などには、鼻の高さで紐をつなぐことによって牛のいたずらを防止した。

また、牛をつなぐ綱は麻で作られるなど、使用するのに最適な身の回りにある植物を利用してきた。

「牛の綱などに麻縄があるので、自家製の麻を作っていた。刈り取った麻を池につけて、腐らして、皮がとける頃引き上げて、皮を池の側でしごいて家に持ち帰り、縄をつくった。(七四歳、女性、下仰木番号34)」

三二 牛のエサ

牛のエサは、朝・夕の二食。稲わら・干し草を主に、麦・稗・粟が入った煮物であつた。藁や干し草を細かく切り、牛鍋で柔らかくなるまで炊き、米ぬかを混ぜて作つた。



家族同様に飼われていた仰木の牛(昭和32年・深田氏提供)

「農家は玄関を入ると、土間奥にかまどがあり、中心に大釜さん、大きな鍋が掛り、左には御飯用鍋、右には牛鍋が掛けてありました。(七九歳、男性、平尾、番号1)」というように、人間と同じおくどさん(かまど)で、牛のエサが作られていた。また、「牛に餌をやり、その後家族が食事についた。(六二歳、男性、下仰木、番号54)」とあり、牛が家族同様に劳われていたことがわかる。

牛のエサである干し草は、「牛の冬用の餌のため、夏に干草をたくさん作っていた。家の敷地内で干していた匂いが開けっ放しの家の中まで充滿していた。(七十二歳、男性、下仰木、番号41)」というように、夏に刈り取りを行っていた。また、「牛のエサの確保のため、堅田方面の草を競って買い付け、時には草の刈り取りを巡って小競り合いが生じたこと」^{〔註〕}もあつた。

三三 子供たちの仕事

毎日の牛のエサの確保は大変であつた。牛をエサ場の草地に連れていきエサを食べさせたり、庭で牛の体を洗うなど、子供たちが牛の仕事を担っていた。

牛のえさの草刈を学校から帰宅後毎日していた。(七五歳、女性、上仰木、番号174)／朝仕事に牛の飼料用の草刈、束にして棒に突き刺しかついで帰る。(七六歳、男性、上仰木番号158)／小学生の頃から牛のエサとして手で草刈りをしたこと。手を切ったり、草を刈っている何とも言えない音や感

触を覚えている。(六七歳、男性、上仰木、番号86)

第四章 売り買いされる牛

四一 馬喰^{ばくろウ}

仰木では、馬喰^{ばくろウ}と呼ばれる牛の仲介業者が出入りをしていた。子牛を但馬などから買い、牛を飼っている家に貸し与え、三、四年後に成牛を賃金を払って引き取り、また子牛を置いていくという委託飼育制度が行われていた。農家にとって重要な現金収入であつた。馬喰は、牛の飼育方法や、種付けの方法、病気の対応も行い、日常的に地域に出入りをしていた。

また馬喰は、出入りする農家の年頃の娘や息子の結婚相手探しもしており、仰木の娘は働き者のためよく声をかけられた。馬喰の仲人で他所の農家と結婚した人もいたという。

四二 品評会

毎年、共進会による畜牛の等級を決める牛の品評会が行われていた。仰木小学校の運動場に百頭以上の牛が集められ、骨格・肉付き・良い顔・性格などで評価された。馬喰の所属する屋号や名前が書かれた油単^{あぶらだん}(化粧布団)を着せて、鼻木には赤か紺の鮮やかな紐をかけて牛を飾った。大切に育てた牛が一級に選ばれることは家族にとって誇りであつた。級がついた牛は高値で売れた。しかし、愛情をかけて育てた牛を売らずに大切に飼

い続ける家も少なくなかった。

「牛の品評会。運動場いっぱいにたくさんの牛が並び品評会が行なわれていた。京都の但馬牛の有名な地域との交流が盛んに行なわれていた。(八八歳、女性、平尾、番号185)」

第五章 牛の祭り

五― 八坂神社の笹神輿

仰木の下仰木地区には、牛頭天皇をまつる八坂神社があり、毎年八月十四日、十五日には牛の疫病払いの「笹神輿まつり」(通称…牛まつり)が開催される。竹と笹で作られた笹神輿が造られ、八坂神社まで渡御し、牛の疫病を諫める牛頭天皇社に神輿が奉納される。祭礼の起源はわかっていないが、「ある時、牛の病が流行ったので、牛の好きな笹を神輿に仕立てて奉納したのが始まり」〔註2〕とされている。十五日の午前中には飼っている牛を落合川に連れて行き洗ったという。かつては、青年会組織により運営されていた。笹神輿は、大・中・小と三基つくり、大きい方から牛頭・多賀・八幡の三社の神輿とされていた。現在の祭りの運営は、「下仰木民芸保存会(笹神輿保存会)」が行い、下仰木子供会により神輿渡御が実施され、笹神輿は一基となっている。〔註3〕

以下、平成二〇年時の笹神輿まつりの流れを記す。

八月十四日、笹神輿の制作が、下仰木の北東にある「マムシ

ワラ」と呼ばれる一角にて行われる。以前は、牛を飼う家が竹を一本奉納しその竹で神輿を作った。牛を飼っていない家は現金を奉納した。余った竹は、竹林を持たない仰木の住民に販売し、青年会の活動資金となっていた。十五日、午前中、八坂神社では湯立祭が執り行われる。その後、正午頃、東光寺の施餓鬼法要が終わると、寺の鐘が数回鳴らされ、それを合図に、マムシワラから子供会によって笹神輿が渡御され、およそ三〇〇



笹神輿の制作 (2008年8月14日)

メートル離れた八坂神社に向かう。笹神輿の後ろには、サカキ（枝ぶりの良い四メートルほどの榎の枝）を牛に見立てて引きずりながら後に続く。八坂神社に着くと、神職による神輿と子ども達のお祓い、餅まきが行われ、祭りが終了する。

アンケートからは、湯立祭りの様子は、牛の疫病除けでもあり、村人の厄除けの祭事であったことが伝わる。

天の山の八坂神社で湯立祭が行われ、釜湯に巫女さんが酒を注ぎいれ、笹でその湯を跳ね飛ばし「湯がかかると病気をせん」とか云うて皆がありがたがって詣るのであった。釜に余った湯はやかん等にもらって帰り、「牛に飲ますと病気をしようらん」と云うて、欲張ってもらってきたものでした。そして家族の者もいただいたのでした。（八三歳、男性、下仰木、番号72）

五二 京都葵祭・時代祭

京都の三大祭である葵祭や、時代祭に練り歩く牛車を曳く牛として、仰木の牛が派遣されていた。葵祭の牛は、実際に牛車を曳く二頭と交代用の二頭の計四頭の牝牛が必要で、牛や馬の調達にあたる明馬会によると、一・五トンもの牛車を曳く体力が求められる上、長距離の巡行でも暴れたりしないように人になれ調教されていないと務まらないという。その点、仰木の牛は、人に慣れ、体力もあり、また京都には大原へ運搬などで行き来をするなどしていたこともあり、重宝されていた。祭の日には、京都へ出向き、牛が無事に務めを果たすかを見物にいつ

たという。

結び

昭和三〇年代中期に農業の機械化が急激に進むことで役牛の飼育は急速に減少し、現在仰木で牛を飼育している家は二軒となった。本稿では、牛に関わる生活の記述・聞き取りを描くことで、牛によって生みだされた人々の社会関係を明らかにし、また、厳しい自然の中で資源を循環させて営みに努めてきた農民の暮らしを描くことを試みた。

牛は、役牛として、農耕や運搬に用い、干し草や麦など農業副産物を与えて飼育をし、委託され肥育した牛は現金収入となり、この時代の持続的な自給自足の農業にはなくてはならないものであった。また、牛は、厳しい生活を協働する一員として、家族のように手厚く扱われ、疫病払いなどの祭事も執り行われるなど、生活の側で大きな「命」を扱うことが心の通った豊かな結びつきを生み出してきた。

牛と人の暮らしを読み解くことで、大量消費・大量廃棄型の暮らしを追い求める中で、切り捨ててきた優れた素材や技術、豊かな暮らしの知恵や自然観を振り返り、「命」や「豊かさ」の意味を見直すこれからの生きる指針のヒントになるはずである。

また、調査の課題としては、仰木に現存する農耕具など民具

の調査ができていないこと、周辺集落などとの流通に関する調査が不十分であることだ。現存するカラスキやウマガワなどの民具調査をすることで、江戸時代には開拓されていた広大な棚田でどのように牛を扱い生産性を保っていたのかを調べてみたい。また、隣接する集落では牛ではなく馬が使われていたことなどの伝承があり、牛の貸し借りなどの流通についてなども牛を扱っていた方にお聞きし記録しておきたいと考える。

参考資料

- ・『天津市下仰木 八坂神社の笹神輿』杉立繁雄
- ・『ふるさと仰木 古老が語る』（発行：仰木史跡会 一九九四年）
- ・『草山の語る近世』水本 邦彦（発行：山川出版社 二〇〇三年）
- ・『牛と農村の近代史…家畜預託慣行の研究』板垣 貴志（発行：思文閣出版 二〇一四年）
- ・『人と動物の日本史2―歴史のなかの動物たち―』河野通明「農耕と牛馬」（発行：吉川弘文館 二〇〇九年）

註

1. 本誌 永江弘之著「生活文化と聞き取り調査、及び、仰木ふるさとカルタ制作 前篇」P 25～72 に詳しく掲載している。

2. 『天津市下仰木 八坂神社の笹神輿』著：杉立繁雄より引用

3. 杉立繁雄氏著『天津市下仰木 八坂神社の笹神輿』によれば、「笹神輿まつり」は、かつては青年会組織（数え十五～二十五歳、若衆組織）のうち、十五～十七歳の前髪によって行われていたものであった。その後、昭和三十四年に前髪の崩壊や時代の風潮もあって一時中断されたが、昭和五一年に伝統的な行事が途絶えることを危惧した有志によりまず一基が復活された。これを受けた地元では昭和五七年には新しく「下仰木民芸保存会（笹神輿保存会）」が結成され、それまでの前髪主導の行事から、現行の保存会および子供への行事と移っていったとある。

成安造形大学附属近江学研究所紀要 第3号

発行日 平成26年3月24日

発 行 学校法人京都成安学園 成安造形大学 附属近江学研究所
〒520-0248 滋賀県大津市仰木の里東4-3-1
電話 077-574-2118

発行者 木村 至宏

編 集 成安造形大学附属近江学研究所

印刷所 宮川印刷株式会社

©Seian University of Art and Design 2014

ISSN 2186-6937